

シンポジウム 2

若手の会ミニシンポジウム：
ウィズコロナ時代のマリンバイオテクノロジー研究
～志定まれば、気盛んなり～

5月28日（土） 9:30～11:00 C会場

企画責任者：前田義昌（筑波大学・生命環境系）

新家弘也（関東学院大学・理工学部）

（概要）

2019年に新型コロナウイルス感染症が発生して以来、既に2年以上が経過したが未だ新型コロナウイルス感染症発生以前の生活に戻る見通しは立っていない。それに伴い大学・研究機関・企業の研究活動、学生に対する教育活動に対する大きな制約が生まれ、漠然とした不安が取り巻いている。とりわけマリンバイオテクノロジー研究は、海洋微生物のサンプリングや、微細藻類、魚類や無脊椎動物の維持など、現場に行かなければ行えない研究活動が多く、特に影響を受けやすい研究分野であると言える。一方で、新型コロナウイルス感染症発生前には活用が難しかったウェブ会議システムやIoT機器など、新しいシステムが多く、研究者にとって身近なものになってきている。これらを利用することで、新型コロナウイルス感染症発生以前よりも効率的に研究活動を行うことが可能となった活動もある。本ミニシンポジウムでは、コロナ禍に大きな影響を受けた若手研究者に、最先端の研究内容と、研究者自身が模索した、コロナ禍における研究スタイルについてご講演いただく。これにより、人と会えない、集まることができない、研究室に来ることもできないという厳しい制約の下でも研究を継続・発展させる手法について情報を共有したい。また、これから研究活動に取り組む次世代に、どの様な状況になっても適応できる研究者の底力やウィズコロナ時代の明るい研究スタイルを示せたらと思う。将来、コロナ禍の様な研究活動を制約する状況が、再び起こらないとは誰にも言えないからだ。本シンポジウムが、様々な立場の研究者の議論を交え、ウィズコロナ時代における研究活動への一筋の道を見出す契機となれば幸甚である。

(プログラム)

9:30～9:35

趣旨説明

○前田義昌（筑波大学）

9:35～10:00

養殖魚における選抜育種の歴史をゲノムから振り返る

～セミドライ研究者のコロナ禍～

○澤山英太郎（日本大学生物資源科学部）

10:00～10:25

コロナ禍での新規実験系の立ち上げ実例

○小祝敬一郎（東京海洋大学ゲノム科学研究室）

10:25～10:50

コロナ禍で再認識した、

微生物 1 細胞ゲノム解析におけるサンプル調製の重要性

○西川洋平（早稲田大学）

10:50～11:00

総合討論・質疑応答

新家弘也（関東学院大学）、前田義昌（筑波大学）